

あたらしい目—モネと21世紀のアート
The New Vision:
Monet and the Contemporary Gaze
2026.6.17-2027.4.7

OF ART

POLA MUSEUM

作家略歴

▶クロード・モネ

1F

▶ナイル・ケティング

▶大森日向子

▶スーメイ・ツェ

B1F

▶ノエミ・グダル

▶エドガー・ドガ

▶アンリ＝エドモン・クロス

▶ジョルジュ・スーラ

▶ポール・シニャック

▶カプワニ・キワンガ

▶ダニエル・スティーグマン・ マングラネ

▶ヴォルフガング・ティルマンス

▶アマル・カンワル

▶フェリックス・ゴンザレス = トレス

▶三嶋りつ恵

B2F

▶ロニ・ホーン

▶タオ・グエン・ファン

▶エミール・ガレ

▶ルイス・C. ティファニー

▶ドーム

▶アローラ & カルサディーラ

▶ピエール・ユイグ

▶今坂庸二郎

▶ルーカス・アルーダ

遊歩道

▶中谷芙二子

▶スーザン・フィリップス

クロード・モネ

1840年パリ生まれ、1926年ジヴェルニー

没。光と大気の変化を描くために革新的な絵画表現を追求した印象派の中心的存在。フランス北西部のセーヌ河口の町ル・アーヴルで

戸外制作の魅力に目覚め、混色を避けた明るい色彩の筆触分割や、時間、天候の差異を描き分ける連作などによって、新しい表現形式を提示した。とりわけ終の住処となったジヴェルニーに造成した庭を題材とした「睡蓮」の連作は、光や大気の表現の集大成であるとともに、平面性の意識や、対象の輪郭を解き放ち、色彩と筆触そのものを画面の主体へ昇華させ、20世紀の絵画に大きな影響を与えている。

ナイル・ケティング

1989年神奈川県鎌倉市生まれ。東京とベルリンを拠点に活動する。パフォーマンス、サウンド、映像、照明、舞台装置などの要素を組み合わせ、鑑賞者を取り巻く時間や空間の経験を再構成する作品で知られる。メディアを介して流通するイメージや出来事への関心を背景に、身体とテクノロジーの関係や現代における知覚のあり方を探求している。

大森日向子

横浜生まれ、幼少期から現在までロンドン在住。5歳からピアノを始め、イギリスのサリー大学でサウンド・エンジニアリングを学ぶ。エド・オブライエン（レディオヘッド）、ケイ・テンペスト、宇多田ヒカルなどのツアーやレコーディングに演奏やプログラミングで参加。2019年以降ソロアーティストとしての活動を開始した。アナログ・シンセサイザーやフィールド・レコーディング、自身の歌声を交えた、

ミステリアスでエーテルな楽曲とライブ・パフォーマンスに定評があり、ロンドン・ナショナル・ギャラリー、テート・モダン、バービカン・センター、ICA他、ロンドンの美術館等でのパフォーマンス多数。

スーメイ・ツェ

1973年ルクセンブルク生まれ。音楽家の両親のもとに育ち、自身もチェロと音楽理論を学ぶ。音楽的な思考を基盤に、時間や記憶をめぐる作品を発表している。音楽の構造やリズムを視覚的・空間的な経験へと置き換え、異なる文化や言語のあいだに生じるずれや余白を詩的に浮かび上がらせる実践で知られる。2003年、第50回ヴェネツィア・ビエンナーレで金獅子賞を受賞。ベルリン、ルクセンブルクを拠点に活動。

ノエミ・グダル

1984年パリ生まれ、同地在住。ロンドンでグラフィックアートを学んだ後、2010年にロイヤル・カレッジ・オブ・アートで写真の修士号を取得。風景の中に舞台装置のようにイリュージョンを立ち上げるステージド・フォトで評価を得ると、近年は古気候学など広範な関心に基づいて、ステージングを映像インスタレーションやパフォーマンスにも展開させている。2024年にマルセル・デュシャン賞を受賞。

これまでにル・ポルティック（ル・アーヴル、2026）、アートエンジェル（ロンドン、2025）、

フォーム美術館（アムステルダム、2015）などで個展を開催。ポンピドゥ・センター（パリ、2023）でパフォーマンスを発表。第16回シャルジャ・ビエンナーレ（2025）などに参加。

エドガー・ドガ

1834年パリ生まれ、1917年同地没。パリ国立美術学校でアングルの弟子ルイ・ラモートに学ぶ。最初はイタリア美術の影響を受けた伝統的な歴史画などを制作していたが、1860年代末から同時代の都市風俗を描き始める。1874年から8回開催された印象派展では中心的な役割を果たす。劇場や競馬場、盛り場の光景、裸婦、踊り子などを、浮世絵や写真に影響を受けた大胆で斬新な構図で描いた。ドガは「踊り子の画家」としてだけでなく、都市の身体や労働を鋭く観察した画家としても捉えられる。絵画のほかにパステル画、版画、彫刻、写真なども手がけた。

アンリ＝エドモン・クロス

1856年トゥエ生まれ、1910年サン＝クレール没。1881年パリに移り、この年フランス美術家協会展に出品。1884年にジョルジュ・スーラと出会い、ソシエテ・サロン・デザンデパンダン(独立美術家協会)創立に参加、以後、定期的に同展やブリュッセルの「レ・ヴァン」(20人会)展などに出品する。1891年から新印象派に加わり、スーラが創始した点描技法とその科学的色彩論を推し進める。新印象派の第二世代を代表するクロスは、点描をより自由で

装飾的な色面へと展開した。南仏の光に触発されたその色彩表現は、フォーヴィスムの画家たちにも重要な刺激を与えた。

ジョルジュ・スーラ

1859年パリ生まれ、1891年同地没。パリ国立美術学校に学ぶ。光や色彩に関する科学理論に啓発され、短い点状の筆触によって絵具を混ぜずに純粹色のまま画面に並べ、観る人の網膜上で色彩の混合を生み出す点描法を創始した。1886年の第8回印象派展で大作《グランド・ジャット島の日曜日の午後》（1884-1886年、シカゴ美術館）が注目を浴び、その傾向は「新印象主義」と名づけられた。スーラの急逝後、その理論はポール・シニャックらによって引き継がれた。新印象主義は次世代の画家たちに広く受け入れられ、フォーヴィスムなどの誕生につながっていく。

ポール・シニャック

1863年パリ生まれ、1935年同地没。1884年、ソシエテ・サロン・デザンデパンダン(独立美術家協会)創立の際に新印象主義の創始者ジョルジュ・スーラに出会い、彼に感化されて点描法による作品を制作するようになる。スーラの没後は新印象主義をけん引する中心的人物として、その理論と方法をまとめた『ウジェーヌ・ドラクロワから新印象主義まで』（1899年）を出版し、理論と実践の両面で大きな役割を果たした。シニャックの作品と著作は、次世代のアンリ・マティスらフォーヴィスムの画

家たちによる色彩の解放に大きな影響を与えた。

カプワニ・キワンガ

1978年ハミルトン（カナダ）生まれ、パリ在住。大学では比較宗教学や人類学を学ぶ。イギリスでドキュメンタリー映画制作に従事した後、パリ国立高等美術学校でアートを学ぶ。自身のルーツであるアフリカ、ジェンダー、コロニアリズムに関するアカデミックなリサーチに基づいたインスタレーション、映像、パフォーマンスを発表する。2020年にマルセル・デュシャン賞を受賞。

これまでにジョアン・ミロ財団（バルセロナ、2026）、CAPC（ボルドー、2023）、ニュー・ミュージアム（ニューヨーク、2022）、ハウス・デア・クンスト（ミュンヘン、2020）、ジュ・ド・ポーム（パリ、2014）などで個展を開催。2024年には第60回ヴェネツィア・ビエンナーレでカナダ館代表を務めた。

ダニエル・スティーグマン・ マンガラネ

1977年バルセロナ生まれ、同地在住。バルセロナでアートと写真を学び、その後20年以上リオデジャネイロに拠点を置く。ラテン文化の歴史やブラジルの自然環境を背景とした、映像、彫刻、音響、作庭など多岐にわたる実践で知られる。有機物と人工物の関係、ルールや偶然性に基づく幾何学的形態、建築・生物学・

人類学に関するリサーチに基づき、西洋中心的なモダニズムに対するオルタナティブな美学を提示している。

これまでの個展にMACBA（バルセロナ、2023）、ピレリ・ハンガービコッカ（ミラノ、2019）、ノッティンガム・コンテンポラリー（2019）、リオデジャネイロ近代美術館（2015）など。リヴァプール・ビエンナーレ（2021）、台北ビエンナーレ（2020）などに参加。

ヴォルフガング・ティルマンス

1968年ドイツ、レムシャイト生まれ。写真を主軸に、映像、出版など多様なメディアを横断して活動する。1980年代後半より雑誌『i-D』などで作品を発表し、1990年代以降、現代写真を代表する作家として国際的に高い評価を得る。ポートレート、静物、風景、抽象イメージまで幅広い主題を扱い、写真の物質性や展示空間との関係を問い続けている。日常の視覚経験やイメージの流通、社会や政治をめぐる問題を探究し、2000年には写真家として初めてターナー賞を受賞。ベルリン在住。

アマル・カンワル

1964年ニューデリー（インド）生まれ、同地在住。インド国内で歴史学やジャーナリズムを学んだ後、映画監督として、権力、暴力、それらへの抵抗といった政治的な諸関係を映し出す作品で世界的な評価を得る。2002年ドクメンタ11への参加以降、アートの文脈でも注目を集め、詩情あふれる映像によって私的な領

域と社会的な領域を横断するマルチ・メディア・インスタレーションを発表する。2021年にはイスタンブール・ビエンナーレの共同キュレーターを務めた。

これまでの個展にパラッツォ・グラッシ（ヴェネツィア、2026）、メトロポリタン美術館（ニューヨーク、2022）、テート・モダン（ロンドン、2018）、シカゴ美術館（2013）など。ドクメンタ11から14（カッセル、2002から2017）に参加。

フェリックス・ゴンザレス＝トレス

1957年グアイマロ（キューバ）生まれ。主にニューヨークで活動。プラット・インスティテュートやホイットニー美術館のスタディ・プログラムでポストモダン理論を学ぶ。87年より、アートの実践に政治的影響力をもたせることを目指すアーティスト集団「グループ・マテリアル」に参加。90年代は私的な事物を公的な領域に持ち込む数々のインスタレーションや野外プロジェクトを発表し、ミニマルでありながら社会的テーマに切り込む作品は現代まで大きな影響力を持つ。96年にエイズにより死去。97年にシュプレンゲル美術館（ハノーファー）で回顧展。2007年には第52回ヴェネツィア・ビエンナーレのアメリカ館で展示された。

三嶋りつ恵

1962年京都府生まれ。1989年にヴェネツィアへ移住し、2011年からは京都にも拠点を構え、両都市を行き来しながら制作を続ける。1996

年頃よりムラーノ島のガラス工房と協働し、無色透明のガラスによる彫刻作品を展開してきた。光を受けて変化し、周囲の空間や環境と呼応する作品は、ガラスの物質性と光の現象を結びつけ、器の形式を超えた有機的な造形を生み出している。京都、ヴェネツィア在住。

ロニ・ホーン

1955年ニューヨーク生まれ。1980年代以降、アイスランドに深い関心を寄せ、その自然環境や気象条件を重要な着想源としてきた。ガラスや金属による彫刻、言語を用いた作品、同一性や差異をめぐる写真シリーズなどを通じて、人や物事を固定的に捉えることへの問いを投げかけ、見ることと認識することの複雑な関係を浮かび上がらせている。ニューヨーク在住。

タオ・グエン・ファン

1987年ホーチミン（ベトナム）生まれ、同地在住。2013年にシカゴ美術館附属美術大学で美術の修士号を取得。もともとは漆画や絹絵を学んだが、近年は、インスタレーション、彫刻、映像、テキスタイル、本といった多様なメディアや支持体を組み合わせた作品を制作する。ベトナムの複雑な歴史、特に植民地時代の歴史に関連するリサーチと、物語や絵画的な素材による虚構を混ぜ合わせ、独自の視覚言語を展開している。

これまでにピレリ・ハンガービコッカ（ミラノ、2023）、WIELS（ブリュッセル、2020）、ジョ

アン・ミロ財団（バルセロナ、2019）などで個展を開催。第59回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2024）、第14回シャルジャ・ビエンナーレ（2019）などに参加。

エミール・ガレ

1846年ナンシー生まれ、1904年同地没。ガラスと陶器を扱う商社を経営する父のもとに生まれ、早くからガラス製作の技術を学ぶ。その後、父の会社を継ぎ、1894年にはナンシーにガラス工場を設置、分業による量産体制をはじめ。1878年、1889年、1900年のパリ万博に出品し、1889年の万博ではガラス部門でグランプリを受賞、陶器や家具部門でも数々の賞を得た。ガレの植物学への深い造詣は生命感溢れる作風を生み出し、世紀末の文学的あるいは象徴主義的な傾向と相まって、芸術性の高い作品に結実している。また、近年は政治的・社会的立場を示した作家としても注目されており、彼のドレフュス支持や共和主義的立場は、銘文を刻んだ「もの言うガラス」に色濃く表れている。

ルイス・C. ティファニー

1848年ニューヨーク生まれ、1933年同地没。宝飾店「ティファニー」の創業者の長男として生まれる。はじめパリで絵画を学んだが、次第に装飾芸術に関心を寄せるようになり、室内装飾会社を設立。その後、ガラス工芸スタジオ、ガラス工房を立ち上げた。「ファヴリル・ガラス」と商標登録した、ガラス表面を虹色にする

ラスター彩（虹彩）によるガラスやステンドグラス、植物から着想を得た有機的な形態の作品が好評を博した。1900年のパリ万国博覧会でグランプリと金賞を受賞、世界的な名声を確立した。

ドーム

1878年にフランス東部ナンシーで創設されたアール・ヌーヴォーを代表するガラス工房。ジャン・ドームに始まり、息子オーギュストとアントナンの時代にエミール・ガレの成功に触発され、工場に芸術部門を設けて美術工芸品としてのガラス生産を開始。さまざまな技術を開発したほか、ガラス工芸作家や美術家などを採用し、自然観察に裏打ちされた優美で繊細な作品を数多く市場に送り出した。1900年のパリ万国博覧会万博に出品、ガラス部門でグランプリを受賞。20世紀にはクリスタル制作へと軸足を移し、現代作家との協働で新たな展開をみせた。現在も芸術性の高いガラス作品を制作し続けている。

アローラ＆カルサディーラ

ジェニファー・アローラ（1974年アメリカ、フィラデルフィア生まれ）とギジェルモ・カルサディーラ（1971年キューバ、ハバナ生まれ）によるアーティスト・デュオ。1995年より共同制作を開始し、プエルトリコを拠点に活動している。身体的な行為や公共空間への介入を通じて、社会的・政治的な問題に新たな視点を投げかけ、詩的な経験へと転換する実践を展開して

いる。2011年には第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ米国館代表作家を務めた。

ピエール・ユイグ

1962年パリ生まれ。映像、彫刻、インスタレーションをはじめ、生物やテクノロジーを含む環境そのものを作品として構成することで知られる。近年では、動植物や人工知能、無機物が相互に作用し、変化し続けるシステムを作品化している。ドクメンタやヴェネツィア・ビエンナーレをはじめ、世界各地の国際展や美術館で発表を重ねている。チリ、サンティアゴ在住。

今坂庸二郎

1983年広島県生まれ。2007年よりアメリカを拠点に活動し、現在はニューヨーク・ブルックリンを拠点とする。風景を主題に、各地の自然環境や気候の変化を長期間にわたり観察しながら制作を行う。湿版写真（コロジオン・プロセス）をはじめとする歴史的な写真技法や独自の暗室技術を用い、写真と絵画の境界を横断するような作品で知られる。時間の堆積や記憶の層を想起させる風景表現を通じて、人と自然の関係や風景の持つ時間性を探求している。

ルーカス・アルーダ

1983年サンパウロ生まれ、同地在住。2009年サンタ・マルセリーナ大学美術学科を卒業。現

実にある特定の場所ではなく、ひとつの構造として「風景」という概念をとらえ、記憶や想像力、心理的状态の表現として風景画を描く「砂漠＝モデル」シリーズが高い評価を受ける。これまでオルセー美術館（パリ、2025）、大徳寺黄梅院（京都、2024）、フリデリチアヌム美術館（カッセル、2019）等で個展を開催。作品はポンピドゥー・センター、バイエラー財団、ピノー・コレクション、テート美術館などに所蔵されている。

中谷 芙二子

1933年札幌生まれ、東京在住。幼少期をアメリカで過ごしたのちノースウェスタン大学を卒業し、パリとマドリードで絵画を学ぶ。1966年に結成された、科学者と芸術家の協働を目指すグループ「E.A.T. (Experiments in Art and Technology)」に参加。1970年大阪万博のペプシ館で、人工霧による《霧の彫刻》を発表する。以降、世界各地で霧を用いたインスタレーション、パフォーマンス、パブリックアートを手がける。1970年代からビデオ作品も制作し、「ビデオひろば」の集団的活動に参加。1980年には「ビデオギャラリーSCAN」を設立した。2008年文化庁メディア芸術祭功劳賞受賞、2017年フランス芸術文化勲章コマンドゥール受勲。2018年に個展「霧の抵抗」（水戸芸術館現代美術ギャラリー）。

スーザン・フィリップス

1965年イギリス、グラスゴー生まれ。音を主要

な表現媒体とし、楽器や環境音、自身の歌声などを用いたサウンド・インスタレーションを通じて、場所に刻まれた歴史や記憶を呼び起こす作品を制作している。公共空間や建築空間に音を配置することで、鑑賞者の身体感覚や空間認識に働きかける実践で知られる。2010年、《Lowlands》によりサウンド作品として初めてターナー賞を受賞。ベルリン在住。